

Exponential group の holomorphically induced  
representation について

東大 理 藤原英徳

1. 我々がここで扱う問題を明らかにする事から始める。

定義.  $G$  をリーマン多様体  $\mathfrak{g}$  を有する 単連結可解リーマン群とする。指  
数写像  $\exp: \mathfrak{g} \rightarrow G$  が全射である時、 $G$  を exponential group と  
いう。

この節においては、 $G$  は常にリーマン多様体  $\mathfrak{g}$  を有する exponential group  
を表わすものとする。実ベクトル空間  $V$  に対し、その  
dual を  $V^*$  で表わす。

定義.  $f \in \mathfrak{g}^*$  とする。 $f$  における  $\mathfrak{g}$  の positive polarization とは、 $\mathfrak{g}_C$  の複素部分リーマン多様体で次の性質を持つものをいう。

1)  $f([f, f]) = 0$ かつ  $\dim_C f = \frac{1}{2}(\dim_{\mathbb{R}} \mathfrak{g} + \dim_{\mathbb{R}} \mathfrak{g}_f)$  ここに  
 $\mathfrak{g}_f = \{x \in \mathfrak{g}; f([x, y]) = 0 \text{ for all } y \in \mathfrak{g}\}.$

2)  $f + \bar{f}$  は  $\mathfrak{g}_C$  の複素部分リーマン多様体である。

3) すべての  $x \in f$  に対して、 $i f([x, \bar{x}]) \geq 0$ .

$f \in \mathfrak{g}^*$  における  $\mathfrak{g}$  の positive polarization の集合を  $P^+(f, \mathfrak{g})$  で

表わす。  $f \in P^+(f, g)$  に対し、  $g$  の部分リー環  $\mathcal{D}$  (resp.  $L$ ) を  
 $\mathcal{D} = f \cap g$  (resp.  $L = (f + \bar{f}) \cap g$ ) で定義し、  $D = \exp \mathcal{D}$  (resp.  
 $E = \exp L$ ) とおく。この時  $X_f(\exp X) = e^{if(x)}$  ( $x \in \mathcal{V}$ ) は  $D$  の  
character (1次元ユニタリ表現) を与える。これから誘導された  $E$  のユニタリ表現を  $\hat{\rho}(f, f, E) = \text{ind}_{D \in E} X_f$  で、その表現空間  
を  $\hat{\rho}(f, f, E)$  で表わす。  $E$  上無限回微分可能な複素数値函数の空間  $C^\infty(E)$  を次の様にして右  $B_C$ -加群と見なす。 $\varphi \in C^\infty(E)$   
と  $z = x + iy \in B_C$  ( $x, y \in B$ ) に対し、

$$\varphi \cdot z = \varphi \cdot x + i \varphi \cdot y$$

とおく、ここに  $\varphi \cdot x$  ( $x \in B$ ) は

$$(\varphi \cdot x)(a) = \frac{d}{dt} \varphi(a \exp t x) \Big|_{t=0}, \quad a \in E$$

で定義される。

$H(f, f, E) = \hat{\rho}(f, f, E) \cap \{\varphi \in C^\infty(E); \varphi \cdot x = -if(x)\varphi \text{ for all } x \in f\}$   
とおくと、  $H(f, f, E)$  は  $\hat{\rho}(f, f, E)$  の  $\hat{\rho}(f, f, E)$  不変な閉部分空間である (cf. [1])。  $G$  のユニタリ表現

$$\rho(f, f, G) = \text{ind}_{E \in G} (\hat{\rho}(f, f, E) \cap H(f, f, E))$$

を  $f \in P^+(f, g)$  から構成された  $G$  の holomorphically induced representation と呼ぶ。 $\rho(f, f, G)$  の表現空間を  $H(f, f, G)$  で表わす。この表現  $\rho(f, f, G)$  に関する我々は以下の問題 1 ~ 問題 4 を考えよう。

問題 1.  $H(f, f, G) \neq \{0\}$  なる為の  $(f, g)$  に対する条件は何か?

問題 2.  $p(f, g, G)$  が既約になる為の  $(f, g)$  に対する条件は何か？

問題 3.  $p(f, g, G) (\neq 0)$  が既約な時,  $p(f, g, G)$  は  $f \in P^+(f, g)$  に依らないか?

問題 4.  $p(f, g, G)$  が可約な時その既約成分への分解はどうなるか?

2.  $\mathfrak{g}$  を  $n$  次元実可解リー環,  $\{0\} = \mathfrak{g}_0 \subset \mathfrak{g}_1 \subset \dots \subset \mathfrak{g}_n \subset \mathfrak{g}_n = \mathfrak{g}_{\mathbb{C}}$  を  $\dim \mathfrak{g}_k = k$  ( $0 \leq k \leq n$ ) なる  $\mathfrak{g}_{\mathbb{C}}$  のイデアル列とする。この時各剩余空間  $\mathfrak{g}_k / \mathfrak{g}_{k-1}$  への  $\mathfrak{g}_{\mathbb{C}}$  の随伴表現により  $\mathfrak{g}_{\mathbb{C}}$  上の一次形式  $\alpha_k$  ( $1 \leq k \leq n$ ) が生じる。

定義.  $\alpha_k$  を  $\mathfrak{g}$  に制限したものを  $\mathfrak{g}$  の root と呼ぶ。

定義. 可解リー環  $\mathfrak{g}$  は、その root  $\alpha_k$  がすべて

$$x \mapsto \mu_k(x)(1 + i\alpha_k) \quad (x \in \mathfrak{g}), \quad \alpha_k \in \mathbb{R}, \quad \mu_k \in \mathfrak{g}^*$$

の形である時, exponential algebra と呼ばれる。

positive polarization の概念は Kähler algebra の概念と非常によく似ている。

定義. exponential algebra  $\mathfrak{g}$ ,  $\mathfrak{g}$  上の一次変換  $j$  及び  $\mathfrak{g}$  上の反対称双一次形式  $p$  から成る組  $(\mathfrak{g}, j, p)$  が次の性質を持つ時, exponential Kähler algebra と呼ばれる。

$$1) \quad j^2 = -1.$$

$$2) [jx, jy] = j[jx, y] + j[x, jy] + [x, y].$$

$$3) \rho(jx, jy) = \rho(x, y).$$

$$4) \rho(jx, x) > 0 \quad \text{for } x \neq 0.$$

$$5) \rho([x, y], z) + \rho([y, z], x) + \rho([z, x], y) = 0.$$

これらの性質に加えて,  $\omega \in \mathfrak{g}^*$  で

$$\rho(x, y) = \omega([x, y]) \quad \text{for all } x, y \in \mathfrak{g}$$

なるものが存在する時,  $(\mathfrak{g}, j, \omega)$  を exponential j-algebra と呼ぶ。

我々はしばしば exponential algebra  $\mathfrak{g}$  自体を exponential Kähler algebra 又は exponential j-algebra と呼ぶ事にする。

リ一環  $\mathfrak{g}$  が完全可解である時, 即ちその root がすべて実である時, exponential Kähler algebra (resp. exponential j-algebra)  $\mathfrak{g}$  は normal Kähler algebra (resp. normal j-algebra) と呼ばれる。我々はまず normal j-algebra に対する Pjateckii-Šapiro の構造定理 (cf. [3]) を一般化して exponential j-algebra に対する構造定理を与える。

定理 1.  $(\mathfrak{g}, j, \omega)$  を exponential j-algebra とする。 $\mathfrak{g}$  に内積  $S$  を  $S'(x, y) = \omega([jx, y])$  ( $x, y \in \mathfrak{g}$ ) で定義し、 $\eta = [\mathfrak{g}, \mathfrak{g}]$  の  $S'$  に関する直交補空間を  $\mathfrak{g}'$  で表わす。 $\mathfrak{g}'$  は  $\mathfrak{g}$  の可換な部分リ一環で,  $\mathfrak{g} = \mathfrak{g}' + \eta$ , 又  $\mathfrak{g}'$  の  $\eta$  上への随伴表現は複素対角化可能である。 $\alpha \in \mathfrak{o}\mathfrak{r}^*$  に対し  $\eta^\alpha = \{X \in \eta; [A, X] = \alpha(A)X \text{ for all } A \in \mathfrak{o}\mathfrak{r}\}$  とき,  
 $j(\eta^\alpha) \subset \mathfrak{o}\mathfrak{r}$  なる  $\eta^\alpha \neq \{0\}$  の全体を  $\{\eta^{\alpha_i}\}$ ,  $1 \leq i \leq r$  とする。こ

の時、 $\dim \eta^{\alpha_i} = 1$  かつ  $r = \dim \mathfrak{O}\mathfrak{I}$  である。今  $\alpha_1, \dots, \alpha_r$  を適当に番号付けてやると  $\eta^\beta \neq 0$  なる  $\beta \in \mathfrak{O}\mathfrak{I}^*$  で  $\alpha_1, \dots, \alpha_r$  以外のものはすべて

$$\frac{1}{2}(\alpha_m + \alpha_k), \quad \frac{1}{2}(\alpha_m - \alpha_k), \quad 1 \leq k < m \leq r,$$

$$\frac{1}{2}\alpha_k, \quad 1 \leq k \leq r$$

(すべての形が生じるとは限らない) の形であり、 $\eta$  は

$$\eta = \sum_{m>k} \eta^{\frac{1}{2}(\alpha_m - \alpha_k)} + \eta^{\frac{1}{2}} + \sum_{m \geq k} \eta^{\frac{1}{2}(\alpha_m + \alpha_k)}$$

と分解される、ここに  $\eta^{\frac{1}{2}} = \sum_k \tilde{\eta}^{\frac{1}{2}\alpha_k}$  更に  $\tilde{\eta}^{\frac{1}{2}\alpha_k}$  は  $\text{ad}_{\eta^{\mathfrak{O}\mathfrak{I}}}$  で不变な部分空間でその複素化は  $\text{ad}_{\eta^{\mathfrak{O}\mathfrak{I}}}$  の  $A \mapsto \frac{1}{2}\alpha_k(A)(1+i\beta_{k,p})$  ( $A \in \mathfrak{O}\mathfrak{I}$ )、 $\beta_{k,p} \in \mathbb{R}$  の形の root に対応する root space の和である。 $\eta^0 = \mathfrak{O}\mathfrak{I}$   
 $+ \sum_{m>k} \eta^{\frac{1}{2}(\alpha_m - \alpha_k)}$ ,  $\eta^1 = \sum_{m \geq k} \eta^{\frac{1}{2}(\alpha_m + \alpha_k)}$  とおくと、 $\eta = \eta^0 + \eta^{\frac{1}{2}} + \eta^1$ ,  
 $[\eta_i, \eta_k] \subset \eta_{i+k}$ ,  $j(\eta^{\frac{1}{2}(\alpha_m - \alpha_k)}) = \eta^{\frac{1}{2}(\alpha_m + \alpha_k)}$  ( $1 \leq k < m \leq r$ ),  $j(\tilde{\eta}^{\frac{1}{2}\alpha_k})$   
 $= \tilde{\eta}^{\frac{1}{2}\alpha_k}$  ( $1 \leq k \leq r$ ) である。 $U_i$  を  $\eta^{\alpha_i}$  の元 ( $\neq 0$ ) で  $[jU_i, U_i] = U_i$  なるものとし、 $S = \sum_{i=1}^r U_i$  とおく。この時  $\alpha_k(jU_i) = \delta_{k,i}$ ,  $\text{adj}_S | \eta^0$   
 $= 0$ ,  $\text{adj}_S | \eta^1 = \text{Id}$ ,  $\text{adj}_S | \eta^{\frac{1}{2}}$  は半単純でその固有値の実部  
 はすべて  $\frac{1}{2}$ 。最後に  $X \in \eta^0$  に対し  $jX = [S, X]$  である。

次に Gindikin, Pjateckii-Shapiro 及び Vinberg の normal Kähler algebra に対する基本定理 (cf. [2]) と exponential Kähler algebra に一般化してやる。

定理 2. exponential Kähler algebra  $\eta$  は半直和

$$\eta = J + H$$

に分解される, ここに  $\mathfrak{g}$  は  $\mathfrak{g}$  不変な可換イデアルであり、部分リー環  $\mathfrak{g}$  は exponential  $\mathfrak{j}$ -algebra である。

3.  $\mathfrak{g}$  を有限次元実可解リー環,  $G$  をリー環  $\mathfrak{g}$  を有する半連結可解リー群とする時,  $G$  が exponential group である事と  $\mathfrak{g}$  が exponential algebra である事は同値である事が知られている。この節及び後に続く節では  $G$  はリー環  $\mathfrak{g}$  を有する exponential group,  $f \in \mathfrak{g}^*$ ,  $f \in P^+(f, \mathfrak{g})$  とかく,  $\vartheta = f \wedge \mathfrak{g}$ ,  $\varepsilon = (f + \bar{f}) \wedge \mathfrak{g}$  とかく。更に  $\beta = \vartheta \wedge \ker f$  とかくと  $\beta$  及び  $\beta$  は共に  $\mathfrak{g}$  のイデアルである,  $\tilde{E} = E/\beta$ ,  $\tilde{\beta} = \beta/\beta$  とかく  $\pi: E \rightarrow \tilde{E}$  を自然な射影,  $\tilde{f} = \pi(f)$ ,  $f_0 = f|_{\beta} \in \beta^*$  とする。更に  $\tilde{f} \in (\tilde{E})^*$  を  $\tilde{f} \circ \pi = f_0$  なるものとする。

定理3.  $\tilde{E}$  は半直和

$$\tilde{E} = n + m, \quad n: \text{イデアル}, \quad m: \text{部分リー環}$$

と分解され, この分解は次の性質を持つ。 $f_1 = \tilde{f} \wedge n_c$ ,  $f_2 = \tilde{f} \wedge m_c$ ,  $\tilde{f}_1 = \tilde{f}|_{n \in n^*}$ ,  $\tilde{f}_2 = \tilde{f}|_{m \in m^*}$  とかく。

- a)  $n$  は  $\beta$  を center とする Heisenberg algebra で  $f_1 \in P^+(\tilde{f}_1, n)$ .
- b)  $f_2 \in P^+(\tilde{f}_2, m)$  で  $f_2 \cap m = \{0\}$ ,  $f_2 + \bar{f}_2 = m_c$ .  $m$  上の一次変換  $j$  と,  $X \in f_2$  に対し  $jX = -iX$ ,  $X \in \bar{f}_2$  に対し  $jX = iX$  で定義してやると  $(m, j, -\tilde{f}_2)$  は exponential  $\mathfrak{j}$ -algebra である。  
更に  $\tilde{f}_1([m, n]) = 0$ .

4. 定理3で導入される  $m$  に定理1を適用してやる。定理1の記号をそのまま用いる事にする。 $\mathcal{L}_i = \sum_{j>i} \eta^{\frac{1}{2}(\alpha_j - \alpha_i)}$ ,  $\mathcal{L}'_i = \sum_{i>j} \eta^{\frac{1}{2}(\alpha_i - \alpha_j)}$ ,  $p_i = \dim \mathcal{L}'_i$ ,  $q_i = \dim \mathcal{L}_i$ ,  $r_i = \dim \widehat{\eta}^{\frac{1}{2}\alpha_i}$  とおく。更に  $f_i = \tilde{f}_2(U_i)$  とする ( $1 \leq i \leq r$ )。次に  $W = \ker \tilde{f}_1 \cap n$  とすると  $W$  は  $\text{ad}_n m$  で不变であり  $\text{ad}_{W_C}$  は対角化可能で  $W_C$  は root space  $(W_C)^{\beta'}$  に分解される。この時任意の root  $\beta'$  は  $\beta' = 0$  又は  $\beta'(A) = \pm \frac{1}{2}\alpha_k(A)(1 + i\beta'_{k,l})$  ( $A \in \mathfrak{o}_2$ ),  $\beta'_{k,l} \in \mathbb{R}$  の形である。 $\widetilde{W}_C^{\frac{\alpha_k}{2}} = \bigcap_{\substack{\beta' \\ \beta' = \frac{1}{2}(1+i\beta'_{k,l})\alpha_k}} (W_C)^{\beta'}$  とおく。 $\widetilde{W}^{\frac{\alpha_k}{2}} = \widetilde{W}_C^{\frac{\alpha_k}{2}} \cap W$ ,  $t_k = \dim \widetilde{W}^{\frac{\alpha_k}{2}}$  とする ( $1 \leq k \leq r$ )。Rossi-Vergne [4] の方法を少しおかれて我々は次の定理を得る。

定理4.  $\#(f, f, G) \neq 10$  となるのは

$$-2f_i - (p_i + 1 + \frac{1}{2}(q_i + r_i + t_i)) > 0, \quad 1 \leq i \leq r$$

なる時かつその時に限る。

この定理における不等式は最後の項  $t_i$  を除いて Rossi-Vergne の結果と一致する。

5.  $G$  は  $\mathfrak{g}^*$  に coadjoint 表現で作用し orbit space  $\mathfrak{g}^*/G$  を生む。 $f \in \mathfrak{g}^*$  を通る orbit を  $O(f)$  で表わす。各 orbit  $\alpha \in \mathfrak{g}^*/G$  に Kirillov-Bernat の意味で対応する  $G$  の既約ユニタリ表現の同値類の代表元を  $\hat{\rho}(\alpha)$  で表わす。 $D = \exp i\mathfrak{d}$ ,  $\mathfrak{d}^\perp = \{l \in \mathfrak{g}^*; l|t=0\}$  とおく。

定義.  $D.f = f + \mathfrak{p}^\perp$  なる時  $f$  は Pukanszky condition をみたすといふ。

定理 5.  $\rho(f, \mathfrak{f}, G) \neq 10!$  とする。 $\rho(f, \mathfrak{f}, G)$  が既約であるのは  $f$  が Pukanszky condition をみたす時かつその時に限る。更にこの時  $\rho(f, \mathfrak{f}, G) = \hat{\rho}(O(f))$ , 特に  $\rho(f, \mathfrak{f}, G)$  は  $f$  に依らない。

6. orbit  $\alpha \in \mathfrak{g}^*/G$   $T^*\alpha \cap (f + \mathfrak{p}^\perp)$  が  $f + \mathfrak{p}^\perp$  の空でない開集合となるものの集合を  $U(f, \mathfrak{f})$  で表わし, orbit  $\alpha \in \mathfrak{g}^*/G$  に対し  $\alpha \cap (f + \mathfrak{p}^\perp)$  の連結成分の数を  $c(\alpha, f, \mathfrak{f})$  で表わす。次の定理は real polarization に対する Vergne [5] の結果を一般化するものである。

定理 6.  $\rho(f, \mathfrak{f}, G) \neq 10!$  とする。

- a)  $U(f, \mathfrak{f})$  は有限集合である。
- b)  $\alpha \in U(f, \mathfrak{f})$  に対し  $c(\alpha, f, \mathfrak{f}) < +\infty$ .
- c)  $\rho(f, \mathfrak{f}, G) = \sum_{\alpha \in U(f, \mathfrak{f})} c(\alpha, f, \mathfrak{f}) \hat{\rho}(\alpha)$ .

### References

- [1] L. Auslander and B. Kostant, Polarization and unitary representations of solvable Lie groups, Invent. Math., 14 (1971), 255-354.

- [2] G. Gindikin, I. I. Pjateckii-Šapiro and E. E. Vinberg, Geometry of homogeneous bounded domains, C. I. M. E., 3 (1967), 3-87.
- [3] I. I. Pjateckii-Šapiro, "Geometry of classical domains and theory of automorphic functions," Gordon and Breach, New York, 1969.
- [4] H. Rossi and M. Vergne, Representations of certain solvable Lie groups on Hilbert spaces of holomorphic functions and the application to the holomorphic discrete series of a semi-simple Lie group, J. Func. Anal., 13 (1973), 324 - 389.
- [5] M. Vergne, Étude de certaines représentations induites d'un groupe de Lie résoluble exponentiel, Ann. Ec. Norm. Sup., 3 (1970), 353 - 384.